

大澤遼可著 『ノヴァーリスにおける統合的感官としての「眼」』

田野, 武夫
拓殖大学

<https://doi.org/10.15017/7391537>

出版情報：九州ドイツ文学. 38, pp.67-68, 2024-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



大澤遼可著 『ノヴァーリスにおける 統合的感官としての「眼」』

田 野 武 夫

本書はノヴァーリス作品の本質を論じつつ、「眼」という身体的特質に着目した画期的考察である。著者はノヴァーリスが構想する主観と客観が一体化した「自己感覚」には身体的経験が内包されていると主張し、とりわけ自己を規定する能力としての「眼」に着目する。この着眼点は極めて斬新といえ、ロマン主義の思想領域に新たな展開をもたらす可能性を秘めているといえよう。同時に本論は作品解釈を基盤としており、その丹念で深い省察を通してノヴァーリスの思考体系を浮かび上がらせることに成功している。

本書では、「黄金時代」というキーワードが論考の全般に亘って用いられている。著者によれば、ノヴァーリスは『『世界』と『精神』との失われた根源的連関』の回復を「新たな根源時代」と規定する。この理想状態では超感覚的な「世界の意味」を感覚的に理解することができ、その感覚器官の重要な要素として著者は「眼」を挙げる。この「眼」の感覚性は絶対的主観と結びつくものではなく、自らをも世界の一部として包含する新たな認識能力をもたらす。この認識能力としての「深みの感覚」が、フィヒテ等の哲学への取り組みや自然科学研究を通して、ノヴァーリスのポエジー論全般を規定する主要要素として展開する。そのプロセスを分析するのが本書の主たる作業である。

第一章では、フィヒテ研究におけるノヴァーリスの認識論の展開を追っている。「自我」と「非自我」を対立関係に置いたフィヒテに対し、ノヴァーリスはこれを対等な関係に置き、両者の交感が可能ない理想状態（黄金時代）をイメージする。ノヴァーリスはこの「黄金時代」の回復に際し、自我と世界との根源的連関を捉え直す「見る者」の視覚的機能を重視していると著者は強調する。

第二章の『夜の讃歌』論では、前章に基づき観念的領域から具体的身体への関心の拡大に関する分析が行われ、同作品の従来への解釈に一石を投じる内容となっている。特に普遍的なものと個別的なものの連関を確認するノヴァーリスの姿勢の中に、自らの自然科学研究と作品に内在するゾフィー信仰との接続が見られるという新たな視点を著者は提示する。

第三章では、前章で言及された自然科学研究に関する考察が行われている。超越性と地上的個性性との連関がポエジーの領域だけではなく、ノヴァーリスの自然科学研究にすでに見られるというのが主たる論の内容である。ここで著者は、自然物の個性性を単なる完結した個体ではなく、世界を構成する大きな連関の表出と見るノヴァーリスの思考母型を抽出する。

第一部「世界の書物化」の最終章である第四章「視覚と身体」では、ヘルダー等の研究から導き出された「造形芸術研究」の内容分析や統合的感覚としての視覚および身体、ま

た質的遠近法といったノヴァーリスの視覚論の理論的支柱が簡潔にまとめられている。この章での重要な指摘は、ノヴァーリスが自然を不完全なものとして、絶えざる「生成過程」と見ている点である。この「生成過程」とは単なる経験的な時間の経過ではなく、超越的なものと感覚的なものの結合点であり、これを「見る者」の「眼」が、ノヴァーリスが要請する視覚とされる。

第二部「書物の世界化」では、第一部での原理的分析を踏まえたノヴァーリス作品論およびポエジー論が展開される。第五章では個と全体との共感の場として開かれた「心情」とポエジーの関係性が提示される。「内なる世界の全体」としての「心情」を言語によって外在化させる「ポエジー」の様々な具体的要素が示されていく。詩人と司祭の同一性、「質的相乗」としての「ロマン化」等がそれである。続く作品論においても、ノヴァーリスの思考形態の原型の抽出が繰り返し言及される。第六章の『ハインリヒ・オフターディンゲン』論では個別と普遍（自然と精神）との相関において世界を認識しようとする試みがあったりするのが描かれていると著者は主張する。具体的にはそれは、作品中のクリングゾールのメルヒェンにおいて、天上と地上の両者を結びつける少女ファール（詩）として描かれる。これらの考察を通して、詩の力による超越的領域と地上的領域の結合という黄金時代の再生への憧憬が、ノヴァーリスのポエジーの理念および実質であることが強調される。

本書全般の特徴として、各章における課題設定と先行研究との関係の明示によって、極めて高い学術性が担保されている点が挙げられる。また徹底的に作品に即して考察する姿勢と、そこから導き出される深い洞察は極めて説得力がある。

ただ本書のタイトルに「眼」が掲げられているインパクトからすると、本書は「眼」という身体性そのものを議論の中心に据えるというよりも、ノヴァーリスの思考の枠組みを浮かび上がらせる構成要素としての「眼」を強調する側面が強い。特に後半は作品論に集中しており、「眼」という身体性そのものの議論は希薄な印象を受ける。

とはいえ、本書の内容は多様な議論へと導く大きな可能性も秘めていると考える。評者の個人的な関心から言えば、敬虔主義的ゾフィー信仰や黙示録的「黄金時代」への志向は、同じく敬虔主義の影響下で精神形成を行なったヘルダーリンとも酷似している部分が多い。また普遍的なものの表れとしての個別的な自然の議論は、シュレーゲルやシェリングの自然観念をめぐる議論を、また身体性ではスピノザの心身平行論との関係性なども想起させる。ノヴァーリスの作品世界に焦点を当てた本書を基盤としつつ、今後の新たな研究の展開を期待させる学術性の高い良書として、本書を位置付けることができる。

（九州大学出版会、2023年）